

# 牛乳アレルギーに対するスティグマ

—子どもとその保護者への精神的サポートのための予備研究—

○小西瑞穂(国立成育医療研究センター)・浅川里穂(千葉県子どもと親のサポートセンター)  
・大矢幸弘(国立成育医療研究センター)

キーワード: 牛乳アレルギー, スティグマ, 認知度, 情報提供, 精神的負担感

## 目的

我が国の食物アレルギーの有病率は乳児で5~10%、学童期は1~2%(アレルギー疾患診断治療ガイドライン, 2010)であり、近年増加傾向にある。その中でも牛乳アレルギーは新生児期から幼児期にかけて食物アレルギーの第2位に位置しており難治例が多い。食物アレルギーの治療は保護者の食物アレルギーに対する正確な理解や知識の上に成り立っており、保護者の役割や責任は重く、精神的負担が大きい(e. g. Lau et al., 2014)。また、食物アレルギーは生活の質を低下させる(Sicherer et al., 2001)ことが知られている。

他人の蔑視と不信を受けるような属性(津田・武藤, 2016)や、その属性に対するマイナスイメージのこと(中根・吉岡・中根, 2010)をスティグマという。Pitchforth et al(2011)はナッツアレルギーの子どもとその保護者のスティグマの存在を報告しており、Dean et al.(2016)は食物アレルギーに対するスティグマが食物アレルギーであることを隠すことに繋がると報告している。様々な疾患や問題に対するスティグマを減少させる介入研究が行われ、一般の人を対象にその疾患や問題に関する正しい情報を提供することで、スティグマが低下することが知られている。

そこで、我々は、牛乳アレルギー児とその保護者の精神的負担感を軽減させるためには、牛乳アレルギー児を取り巻く周囲の人々が正しい知識を身につけスティグマを軽減し、適切な対応を行うことが重要であると考え、牛乳アレルギーに関する正しい情報提供を可能にする冊子を作成することを目的とした。その予備調査として、食物アレルギーではない就学前後の子どもを持つ保護者を対象として牛乳アレルギーに関するウェブ調査を行い、一般市民の牛乳アレルギーについての認識やスティグマについて検討した。

## 方法

**対象者** ウェブ調査会社に登録している者のうち、就学前後(5歳~8歳)の子どもを持ち、自身と子どもに食物アレルギーがない保護者100名(男性・女性各50名、平均年齢41.47歳(SD=5.15))を対象とした。対象者の子ども(N=196, 男児N=96, 女児N=100)の平均年齢は7.33歳(SD=3.78)であった。

**質問項目** フェイスシート: 性別、年齢、居住地域、子どもの年齢、最終学歴への回答を求めた。

**調査項目**: 以下の4つのカテゴリーから構成された17問への回答を求めた。1. 牛乳アレルギーの認知度 4項目、2. 牛乳アレルギーの人の症状や治療、生活 7項目、3. 牛乳アレルギーの子どもやその保護者の負担感 4項目、4. 牛乳アレルギーのお子さんや保護者へのサポート 2項目であった。そのうち、自由記述は2.と3.に各1項目、4.に2項目が含まれた。

**手続き** 調査はウェブを介して行った。回答者自身と子どもに食物アレルギーがないことを条件として対象者を選定した。

**倫理的配慮** 本研究は国立成育医療研究センター倫理委員会の承認を受けて行った。調査は研究同意の得られた者を対象とし、匿名で行い、個人情報取得しなかった。

**利益相反開示** 開示すべき利益相反関係は一切ない。

## 結果

本研究の対象者は自身と子どもに食物アレルギーがない者を対象としたが、牛乳アレルギーという疾患名を72%が知っており、周囲に牛乳アレルギー患者がいると11%が回答した。また、牛乳アレルギーは「治ると思う」と答えたのは66%で、完治する年齢は6歳~12歳未満が42.4%、3歳~6歳未満が27.3%、18歳以上が12.1%、12歳~15歳未満が9.1%、15~18歳未満が6.1%、1歳~3歳未満が3%という回答であった。牛乳アレルギーの治療法については、「治療薬を飲む」が33.6%、「少しずつでも毎日牛乳を飲む」が23.4%、「自然治癒」が21.2%、「注射をする」が10.9%、「治療法はない」が8.0%、「症状が出て牛乳を飲む」が1.5%、「その他」が1.4%であった。約90%が牛乳アレルギーの子どもと保護者に心理的負担感があると予測していた。また、「あなたのお子さまの友人が牛乳アレルギーだと知ったら、あなたはどのように感じますか」という自由記述による回答には、「かわいそう」、「大変」、「辛い」といったネガティブな回答が多かった。牛乳アレルギーの子どもや保護者にできるサポートとしては、牛乳アレルギーや食べてはいけないものを調べる、保護者の話を聞いてあげる、保護者に対策を聞くなどの積極的な回答がある一方、牛乳アレルギーの話題には触れないといった消極的な回答もあった。

## 考察

牛乳アレルギーの認知度は72%と比較的高かった一方で、牛乳アレルギーの治る時期や治療については誤った認識が多かった。これらの知識の不足は牛乳アレルギーの子どもやその保護者をサポートする際の障壁やスティグマに繋がる可能性が示唆された。牛乳アレルギーの子どもや保護者の精神的負担感には90%以上の人が推測しており、自由記述でもネガティブな回答が目立ち、牛乳アレルギーに対するスティグマによって支援に繋がりにくいことが予測された。

以上より、牛乳アレルギーの子どもや保護者の精神的負担感を軽減させるためには、牛乳アレルギーに関する正しい知識の提供により、牛乳アレルギーに対する一般市民の不安や疾患に対するネガティブなイメージを変化させることが重要と考えられる。

(KONISHI Mizuho, ASAKAWA Riho, OHYA Yukihiko)